

□書 評

K. Beck 他著

Atlas der Laparoskopie

癌研究会附属病院内科 中 尾 功

医師にとって臓器を直接観察し、しかもその組織学的所見までも、簡単に調べることが出来たらということは一つの大きな楽しい夢であろう。そんな希望を託して腹腔鏡が考案され、本邦に導入されてからも既に久しい。その方法の安全性、侵襲の少ないことなどが歓迎されて、最近では普通の病院でも簡単に施行するようになり、数多くの業績が蓄積されてきている。しかし、腹腔内臓器の肉眼的所見の多様性、あるいは生検組織像との不一致などから、多くの術者が判断に困惑することが可成り多い。そんな時に出版されたこの Beck の図譜は特に垂涎の書とい

っても過言ではないと思う。彼の豊富な経験例から 380 葉におよぶカラー図版を適確に分類して、素晴らしい印刷にして見せて呉れる。写真の鮮明さ、色彩の再現性の良さは抜群であり特筆に値する。

本書の内容は、始めに腹腔鏡施行に際しての概略が簡潔に記されており、次に胆、肝、黄疸の鑑別、門脈圧亢進症、脾、胃腸管、後腹膜、女子生殖器の順になっている。各項目について、先ず総括的な解説があり次に各図譜について説明が対比して記載してある。

臨床的に最も問題となり、また本書でも多くの頁が費やされている肝

疾患について触れてみると、肝表面の瀰漫性の変化を起こすものとしては、急性、慢性肝炎、細胆管炎、肝周囲炎など炎症性のものの他に、肝硬変 2 種類、脂肪肝、鬱滞肝、鉄沈着症などをとりあげ、それぞれ直接胆嚢造影、針生検を駆使して得られた生理的、組織学的所見を裏付けにして、簡明にして納得のゆく解説をして読者の蒙を啓いてくれる。

また図譜の並べ方にしても、各病像を理解し易いように細かい配慮がなされており、著者の本書に対する愛情が窺い知られる。

使用されているドイツ語も簡明であり、腔腹鏡を本当に必要とする内科医は勿論のこと、外科医ならびに臨床病理の方々も、本書を繙いて益す所大であると信ずるものである。

206 S. 385 Abb. davon 369 mehrfarb. ¥13,440 F.K. Schattaue-Verlag Stuttgart 刊

医学書院洋書部扱